活動支える大学、学生

岡山発 国際貢献 チと手と手

AMSA

国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市楢津）が、津波被害の復興支援にかかわっているインドネシア・アチェ州（スマトラ島）で、その補佐役的活動をしている現地の学生たちがいた。AMSA（アムサ＝アジア医学生連絡協議会）のメンバーだ。

州都バンダアチェの中高一貫校で、活動の一端をのぞいた。教室に居並ぶ高校生が約百六十人。その真剣なまなざしを受けて、メンバーの医学生男女三十人ほどが、マネキンを使って人工呼吸や心臓マッサージの方法を教えていた。

「恥ずかしがらないでやってみて」「リズムに注意して」

気道確保や胸を圧迫する場所の探し方、呼吸の確認など、基本的な事柄の説明があった後、高校生が実際にチャレンジした。

この学校は津波被災時、寄宿舎にいた生徒約四十人が逃げ遅れて亡くなった。「人が倒れていても、何をどうすればいいか分からなかった」という忸怩（じくじ）たる思いの中から出てきた学習ニーズ。それに応えて実施している緊急時対応訓練だ。一帯の学校は類似例を抱えているので、訓練の要請は多く、メンバーは一校につき二回は行うことにしている。

高校生の真剣なまなざしを受けながら、緊急時対応訓練を行うAMSAの男女医学生（奥の二人）＝インドネシア・バンダアチェ

原点

AMSAは、AMDA代表の菅波茂（五九）が一九八〇年、結成に尽力し、AMDA発足へとつながっていく彼の活動の原点ともいえる医学生組織だが、アジアの保健向上を目指したネットワークとして現在、日本を含め、十カ国・地域に支部を持って活動、毎年二回、国際会議で交流を深めている。会議は多く集まる夏場、四百人ほどを数える。

インドネシア支部の中心を担うのは、同国のAMDA支部長フスニ・タンラ（六二）が教授をしているマカッサル（スラウェシ島）のハッサヌディン大医学部。ここの学生だけで約二百人のメンバーがいる。当然、津波被災直後の緊急支援でも活躍した。AMDA本部などの要請を受けて、学生メンバーがアチェ州に赴いて、医師の補助などでその専門性を発揮した。

緊急救援終了後は、バンダアチェの大学医学部にAMSAが発足、AMDAの現地スタッフとして復興支援プロジェクトを支え、学校の緊急時対応訓練などを担っているというわけだ。

災害現場での活動は、若者の純粋な心を刺激しもする。女子学生チュ・ライラ・ファウジア（二一）は言った。

「個人の病院を建てて、お金をもうけることに興味はない。医者になって、私を必要としている人がいるなら、どこへでも行くわ」

大学院

菅波は、こうした学生や大学とのつながりをとりわけ重視している。国内では、大阪大大学院国際公共政策研究科との関係が一つの典型例だ。国際社会で活躍できる人材育成を目指すこの研究科で、星野俊也教授と提携、これまでも院生や卒業生をミャンマーやケニアの支援プロジェクト現場へ送ってきたところだが、既述のとおりアチェ州復興支援現場の現地事業統括金山夏子（三九）もまた、現役の同大院生だ。

大学の重要度は、被災地で活動する人材の面だけではない。

「被災地支援は一時的には燃えるが、風化していく危険性がある。大学は、私たちの成果を政策提言として世の中に出してくれる能力がある。貴重な経験や知識を後世に伝えるために、大学との連携は今後、さらに重要になる」

菅波の実践で得た実感だ。（敬称略）